



Title	Gallia 58号 HOMMAGES
Author(s)	
Citation	Gallia. 2019, 58, p. 91-114
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/72872
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大人の振る舞いに憧れて

足立 和彦

博士後期課程に進学した2003年度に、北村先生のボードレールの授業に出席することができました。一篇一篇の詩を丁寧に読み込んでいくことを通して、ボードレールの魅力、そして文学テクストを読む楽しさを教えて頂きました。同じ頃に、先生の授業のTAを務めたこともよく覚えています。「学ぶ」側ではなく「教える」側から授業を見るという経験を初めてすることで、いつか自分が教壇に立つ日の心構えを準備することができました。TAとしてはたいしてお役に立てませんでしたが、授業を円滑に進めてゆく手際を実体験を通して学べる貴重な機会を頂きました。

私が実際に働き始めた後にも、北村先生に目をかけて頂くことがありました。先生がお作りになった教科書『フランスを読み解く鍵』の改訂のお手伝いをし、さらに新しく第3巻を作成する際には、著者の一人に加えて頂きました。この本は、「フランスらしさ」を代表する人や物について書かれたフランス語の書籍を、日本の学習者向けの教科書に編纂したのですが、その仕事をする際、編集方針として先生が特に心を配られたことが2点あると伺いました。まずは、歴史的なトピックを扱う際に、それが現代社会とどのような関係を持っているかを示すこと。そしてまた、日本でどのように受け入れられているかを示すことです。それによって今の日本の学習者の関心を惹くものにしようという先生のご配慮の内に、教科書を作るはどういうことかを学ばせて頂きました。

こうして振り返ってみると、実際に仕事をされている先生のお姿を拝見しながら、自分が色々なことを学んできたことに改めて思い到ります。いつも優しい笑顔で接してくださる北村先生は、さりげなく「大人の振る舞い」のお手本を示してくださいっていたのでした。先生のこれまでのご厚情に深く感謝いたしますとともに、これからますますのご多幸とご活躍を心よりお祈りいたします。

(名城大学准教授)

北村先生の思い出

井元 秀剛

私が阪大に赴任したのは1993年、当時フランス語教育講座（という名称だったと思うが）の唯一の独身教員の私は、当然のことながら単身なので大学に歩いて行ける石橋にアパートを借りた。単身者用の賃貸なのでやや高めとはいえ、隣近

所は阪大生である。両隣は女子学生のはずなのだが、なぜか夜中に男性の声が聞こえてきたり、隣の隣は私の授業を取っている学生で宿題の答案を家の郵便受けに入っていたりと、なんだか落ち着かない暮らしをしていたのだが、講座の中では一番大学の近くに住んでいるだろうと勝手に思って変な優越感に浸っていた。ところが実際はもっと上がいるらしいという。北村先生である。先生は当時国際交流センターに住んでおられ、留学生の世話を家族ぐるみでなされていた。ちょうど引っ越しの時にお手伝いに伺わせていただいたことがある。当時から学生を大切にされ、留学生をはじめとして多くの学生と常に変わらぬ交流をもたれていた。ご興味は文学を中心として芸能やスポーツなど幅広く、ごらんになったテレビ番組のコメントなどを聞いていると、教養に裏打ちされた洞察力に富む見解が示され、番組そのものよりも面白かったりする。そんなわけで話も引きつけるし、常に多くの学生に囲まれていた。特に女子学生にはもてた。クロバスと呼ばれる学生の講義情報でも、「美男子でかっこいい。授業中も思わず見とれてしまう」などと、こちらがうらやましくなるようなことが書かれている。当時はドイツ語の独身男性3人と私の4人組でつるんでいることがよくあって、バレンタインデーの頃など、N先生なんか自分は辛党で甘い物などさっぱり召し上がらないくせに、やれ、単位チョコだの義理チョコだの、よく4人で話題にしていたものだ。ところが義理のおこぼれに預かるしかない我々4人組とは違って、北村先生は大層もうららしい。奥さんに嫉妬されて大変なんだという話を聞いたことがある。

ただ、先生は常に折り目正しくされていて、どんなにもても変な噂がたったりすることは決してなかった。人権問題委員として幅広く活躍され、全学の責任者も務めておられたことがある。学会活動でもフランス語フランス文学会の関西支部長などの要職に数多くつかれ、学内外を問わず幅広い人脈をお持ちであった。海外に講演によばれ、英語でご専門の話をなされたこともある。

教育にかける情熱もひとしおで、仏僕の世話をずっとなされており、週末などはそのお仕事でかなりの時間を使われていたのではないかと思う。東京までよく出かけていらした。その尽力のおかげで、阪大は特に仏僕の受験生が多い。先生のお持ちのクラスの学生からもずいぶんとたくさんの合格者を出されている。今もこれから先のフランス語教育のありかたについて深く考えておられ、私達もその思いを引き継いでいかなくてはと絶えず思われる。このような熱い先生がまた一人去られてしまうのかと思うと本当に寂しく思う。

(大阪大学教授)

思い出すことなど

岩根 久

私が親しみを込めて呼ぶ「北村さん」こと大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻現代超域文化論講座北村卓教授が、平成31年3月をもって大阪大学の教壇から去られる。前もってわかっていたことではあるけれど、誠にもって寂しい限りだ。同じ枝の木の葉が、いやいや、同じ巣の雛鳥が機が熟して先に飛び立つのを見送るといった心境だ。私自身も一年後、同じ巣から飛び立つ。

北村さんと出会ったのは1973年（昭和48年）の春で、北村さんは19歳、私は18歳だった。その頃、理学部に入学したばかりで、西も東もわからないまま、高校の時にやっていたラジオ講座・テレビ講座のフランス語を実際に使ってみたいと思い、「フランス語会話」という授業を受講することにした。1年次配当のフランス語会話Aは同じ時間帯に理学部必修の授業が入っていて履修出来なかつたため、2年次配当のフランス語会話Bを履修した。担当はルース先生。しかし、この授業で北村さんに出会ったのではない。あるとき、授業終了後、中川敬さんという仏文の先輩からコンパへのお誘いがあって、出会ったのはそのコンパの席上だった。

それ以降、北村さんと愉快な仲間たちのグループに入って、石橋でよく遊んだ。バルかV7に行けばたいてい誰かがいて、そのあと面子が揃うと麻雀をしたり飲みに行ったりした。飲みに行くのは大抵が保呂醉、北村さんのバイト先だったところだ。夏になると一緒に和具に行って、昼は水泳や卓球あるいは麻雀。夜は海辺で花火をしたりして大宴会、夜明けを迎えることもしばしばだった。また、これは北村さんの発案だと思うが、ルース先生が阪大を去られたあと着任されたリシャール＝シェヴァリエ先生を誘って京都に行き、御所でカンケリ（Vous donnez un coup de pied sur la boîte...などと説明）をしたこともある。あとのことになるが、大学祭のとき、北村さんの演出のもと安部公房原作『愛の眼鏡は色ガラス』をグループで演じた。北村さんは主人公の青年、私は「白医者」という配役だった。

記憶をたどれば、キラキラした思い出がたくさん出てくるが、このあたりでやめておこう。そんなことより、窮屈な束縛から開放されて自由に羽ばたける空のことを北村さんと共に夢想したい。

（大阪大学教授）

北村先生からかけて頂いた言葉

上江洲 律子

2018年6月3日日曜日、獨協大学で開催されたワークショップ「アンドレ・マルローと視覚芸術」の会場に駆け込み、安堵しながら席に着いて顔をあげると、少し前の席に北村卓先生が座っていらっしゃることに気づきました。もしかすると、そんな風に思いがけず久しぶりにお見かけしたささやかな驚きのせいかもしれません。コーディネーターによって会の始まりが告げられるまでの間、北村先生がまとう柔らかな空気に誘われるよう、古い記憶が思い起されていきました。

北村先生に初めてお目にかかったのは学部3年生の時です。その頃、私は体育会系の部に所属し、日々、練習に打ち込んでいました。そのため、フランス文学を専攻として選択しながらも、仏文研究室では自分を場違いな存在のように感じていました。実際、かなり委縮していたと思います。それに対し、当時、助手を務められていた北村先生は、いつも頓着しない風情で私に声をかけて下さいました。勿論、それは北村先生にとって些細な日常業務の一つ。けれども、日々のその何気ない言葉に私は自分が否定されていないと感じさせて頂いていました。私にとって北村先生はいわば研究室の日だまりでした。

学部を卒業した後、私は一般企業への就職を経て、大学院に進学しました。懐かしくもすでに疎くなってしまった待兼山のキャンパスに通い始めるにあたり、最初に、北村先生が担当されている科目「言語文化生態論」を受講したのは、その思い出に促されたという面もあります。また、そこで取り上げられるロラン・バルトの『表徴の帝国』に心惹かれたからでもありました。週に一回、テクストをめぐり投げかけられる北村先生の問いかけ、学生同士の議論、仮説として構築されるさまざまな観点。その授業を通して「世界の見方」に関する読み解き方の一端に触れさせて頂きました。

とりわけ心に刻まれた場面があります。私が修士論文の主題としてマルローの作品を選んだ後のことでした。北村先生の授業が行われていた言語文化研究科棟の廊下だったと思います。北村先生が私にマルローについて一言口にされたことがあります。作家としてなのか、個人としてなのか、私との相性なのか。その時、私はその言葉の真意を問うことも、応答することもできませんでした。しかしそれだからこそ、私がマルローの研究を続けていく上で、常に自分に問い合わせる言葉となりました。ワークショップに参加している今、自分の研究を他者の視点で捉える一つの手法を北村先生から頂けたと実感しています。

(沖縄国際大学准教授)

北村先生への感謝

太田 晋介

2005年に大阪大学に入学した私は、学部生時代、北村先生が文学部で開講されていた授業を受講するという幸運にめぐまれた。この授業は、何セメスターもかけて『悪の華』を始まりから終わりまで通読するという昨今なかなかお目にかかる骨太な授業であった。当時まだフランス詩を研究対象にすることを決めるどころか、院進学さえ頭になかった私だったが、この授業は毎週楽しみに出席していた記憶がある。先生の学者としての引き出しあはたいへん多く、授業でも様々な話題をお話しいただいことを覚えている。バルト、ジュネットといった名を私が知ったのはこの授業を通してだったし、ボードレールの作品が、福永武彦を媒介にして、遠く日本の特撮映画『モスラ』にまで影響を与えていたことを説明していただいたときの知的興奮は今でも鮮明に記憶している。私が授業を受講し始めたときすでに「憂鬱と理想」の後半部にさしかかっていたが、その後二年ほどかけて『悪の華』を先生と一緒に読むことができたことは現在も詩、そして現代性と呼ばれるものについての勉強を続けている自分にとってたいへん貴重な財産である。

これだけでも感佩すべき学恩だが、北村先生にはもう一つ大きなものを修士課程2回に在籍していたときいただいた。当時、私は博士課程に進学するかどうかを迷っていたのだが、とりあえずきちんとした修士論文を書くことができたなら研究者になってもよいのではないかと漠然と思っていた。結論を先取りすると、きちんとした論文は書けなかった。当時私が書いたものは、熱意だけが空回りした非常に粗末なものであり、とりわけ形式的側面への配慮に欠けていた。驚いたことに査読者の一人であった北村先生は私のそのような「論文もどき」をたいへん丁寧にお読み下さったばかりでなく、水に水素が混じるが如く存在しているそれら書誌や引用の表記の誤りについて、一つ一つ付箋を貼った上で、その添削したものを口頭試問の日に返却してくれたのである。おそらく先生は当たり前のこととしたとしか思っていないと思うが、北村先生のこの行動のおかげで、私は研究者の道を進む覚悟を固めることができた。詩や文学を研究するためには熱意だけでなく厳密性を尊ぶ必要があるという当たり前のことが当時の自分が軽視していたことの重要性を先生に態度で示していただいたことで心のつっかえのようなものがなぜかとれたのである。口頭試問後、先生に朱入れされた箇所の手直しを終えたとき、私は研究者の卵としてようやく第一歩を踏み出すことができた気がする。

さまざまな顔をお持ちの北村先生であるが、私にとってはゆえに詩を読むことの楽しさと詩を学ぶことの厳しさを教えて下さった教育者としての印象が強い。北村先生は、ちょうどボードレールがレオン・クラデルのような存在に対してし

たように、自分より年下の才能のない若者を根気よく教え導いてくれたのである。もちろん先生のレクチャーは『悪の華』の作者よりもはるかにやさしく気遣いに満ちたものであったのだけれど。すこしでもよい論文、よい仕事をすることで北村先生からいただいた多くの学恩に報いたいと思う。

(大阪大学助教 (フランス文学研究室))

ハニー北村の真実

柏木 隆雄

北村卓さんに初めて会ったのは、1982年10月23日～24日の岡山大学での日本フランス語フランス文学会秋季大会の会場だった。ちょうどその年の7月の終わりにパリ留学から帰って、その頃岡山大歯学部講師でいた家内の弟夫婦にも久しぶりに会えるということで出かけたのだが、ガリアの研究会にも長い間ご無沙汰していたから、阪大の若い人が発表する分科会に出て、その場にいた阪大の院生と言葉を交わした。それが北村さんだった。彼がその時の発表者だったのか、聴取に来ていたのかはちょっと記憶がぼやけている。ただそれまで一面識もないのに声をかけた私に、北村さんは、戸惑ったろうに、きちんと応対してくれて、なかなか感じの良い学生さんだと感じ入った。

その翌年4月に仏文の研究室では助手の金崎春幸さんが言語文化部へ移ることになって、その後任に北村さんが就き、思いがけなく当の私も同じく助教授として赴任して、それから今に至る長い付き合いが始まる。北村さんが『ガリア』仏文研究室創立50周年記念号に寄せたエセーで、私が仏文研究室に現れて、空気が一変して嵐のようになった、と書いておられるが、私自身は嵐を起こそうなどと思っていたわけではない。ただ文学部1年生の後期から英文学の藤井治彦先生に親炙すること深く、神戸女学院大学時代も、毎週一回私の研究室でフランス語のテクストを読むほか、ほとんど毎日のように散歩したり、お互いの家を行き来したりして、文学研究のあり方、研究室のあり方について教え込まれていたので（藤井先生は私の研究室でフランス語を読む時、私に対して常に敬語で接しておられたが、会読が終わって一歩外へ出た途端に、いつもの「君ねえ・・・」と教え諭される口調を取られた）、ついつい藤井先生流の教員、学生の流儀が頭に入っていたのを、そのまま生覚えに実行したにすぎなかつたが、原亨吉先生、赤木昭三先生の緩やかで寛容な流儀に慣れた仏文研究室では、まことに異質に思われたに違いない。北村さんはおそらく戸惑いながら、それでも一生懸命合わせて下さった。和田章男さんも同じ号のエセーに書いておられるように、当時私は仏文研究室にいるよりも、英文の研究室に馱弁りに行くことが多く、夕刻下校の際に英文歴代助手の白川計子さん、新野縁さん、英語学の富永英夫助手などと、藤井先生を囲

んでのお茶や夕食の会に北村さんが付き合ってくださったことも数知れない。

じっさい北村さんは無理しながらもこの35年間よく付き合って下さった。私も多少人付き合いは良い方だとは思うが、それでも不機嫌に接する場合もある。しかし北村さんは、あからさまに嫌な顔をせず、いかにも愉快そうにその場を楽しんでいる風に見える。あるいは見えるだけかもしれないが、それだけ寛容であり、それだけ相手を尊重しておられるのがよくわかる。よく考えるとガリアのみならず、学会の関西支部会、全国大会、役員会、比較文学会も含めて、様々な席でどれほど二人相並んで連なったか知れない。そしていつもの明るいハンサムな顔がある。私は田村正和がテレビに出ると、いつも北村さんを思い出す。但し、あのにやけて暗い言い回しはまったく北村さんに似てもいはず、北村さんの口調はあくまで明晰で快活だ。

それにしても北村さんとの数えきれぬ同行の場で、忘れられないのは1996年夏。学会が主催する志賀高原スター・ジュの幹事を二人ながら務めた時だ。私は現地責任者で、北村さんは庶務か教務か。とにかく高原のホテルの食事が済み、スタジエールたちも部屋に引き取ったあと、幹事一同私の部屋に集まって酒盛りをする。その際に活躍したのが部屋に唯一備わる保温機能のない原始的な1リットルの電気ポット。そこに湯を沸かして籠の店で買いこんできた白菜やら豚やらを放り込み、彼と二人で按配した調味料で食べる。このポット、何でも炊けるということがわかって、関東からの佐々木滋子氏や梅比良眞史氏など各委員も北村さんのアイデア料理に舌鼓を打ちながら鯨飲談笑して深夜に及んだ。はては酔いつぶれた某氏を夜中の2時ごろ部屋まで北村さんの介添えで運んだこともある。しかし感心なことに毎朝誰も二日酔いの顔を見せなかった。以来北村さんはその時の友情をさらに広げて、学会の度にその宴を再現しているようだ。

学生たちが編纂するいわゆる講義情報なるものを覗いてみると、北村さんはいつも「ハニー北村」とあだ名されている。これは点数が甘い、ということではなく、教室にいると何となくハニーな、ハッピーな気分になる、ということだろう。そのことは教室だけでなく、学界においても同じだ。ボードレールが専門の彼は、先だっても海外に赴いて日本のボードレール研究について発表するし、比較文学の分野でも永井荷風の『珊瑚集』や岩野泡鳴とフランス象徴詩の研究なども貴重で、さらに宝塚歌劇の歴史にも蘊蓄を披露する。これは私自身がそうでありたいと願うから敢えて想像するのだけれど、北村さんは人との融通無碍な付き合いの中で、一見にこやかに楽しんでいるように見えながら、実は多くのことを友人たちの会話からもヒントを得て、それを不斷の読書研究によって練り上げているのではないか。

金崎さんを送るエセーにも書いたが、赤木先生は常に「あり得べき学者」の姿を教え子たちに見ておられた気がする。私がジユール・ルナール全集の編訳を漸く終えて最終第16巻をお届けしたご返事に、「そろそろつまらない仕事はやめて、本来の仕事に掛かって下さい」とあった。おそらく私が専門と自称するバルザックに関してきちんとした仕事を示していない事への苛立ちをそう表現されたに違

いない。35年間にわたって、遊びや二次会に北村さんを誘い続けた私が赤木先生に倣うのはまことに烏賜の沙汰だが、これからは少し雑用から離れて自分の時間が取れるようになる「はずの」北村さんには、今後とも北村さんらしい著作を期待したい。それらを楽しみに待っているのは私だけではないはずだ。

(大手前大学客員教授)

北村卓くんの思い出

小林 宣之

ぼくが北村卓先生に出会ったのは大阪大学文学部に入学した1972年の春のことです。住み始めたばかりの鉢塚の下宿を出て畠の中を歩いていると、どこからかぼくの名前を呼ぶ声がします。見回しても誰もいません。もう一度声がして、見上げると、隣の下宿の二階の、トイレと思われる小さな窓から見えたばかりの同期入学の男の子の顔が覗いていました。それが北村くんとの半世紀にも及ぼうかという個人的な付き合いの始まりでした。

藤井さんというぼくの下宿と橋本さんという彼の下宿は、その時ぼくの歩いていた畠を挟むようにして隣り合っていましたから、それ以来よく行き来しました。彼の部屋の魅力はそのささやかな蔵書の質にあり、日を追ってその量も増えていました。利発な美少年の艶聞を聞かされるのはいささか閉口でしたが、回転の速い彼の頭の紡ぎ出す諸書の読後感を拝聴するのは楽しみでした。その後彼はニュー巴里苑というアパートに引っ越すのですが、近くに住む友人たちとリヤカーを借りてきて彼の家財道具を運んだ牧歌的な光景が甦ってきます。ぼくもその後光荘というアパートに引っ越しますが、互いの行き来は続き、お互いの本棚も次第に充実していました。

80人いた同期入学生のうち今も付き合いのあるのはほんの数名ですが、最近はめったに会うこともない北村くんは最も親しい友人の一人と言ってよいでしょう。

その北村くんがこのたび退職を迎えることになり、その間の月日の堆積を思うとまさに茫然たる思いです。大学院に進んで研究室の助手、言語文化部への就職、教育、研究、フランス語普及活動と、北村くんのその後の八面六臂の活躍は多くの人のよく知るところです。複数の学会の信頼も篤く、それぞれの要職にも就いて卓抜な運営能力を發揮してきました。

そうした北村先生の非の打ちどころもないプロフィールはしかし、この思い出を綴るぼくの中では、どこか他人行儀な別人の趣きがあります。ぼくにとっての北村くんは、責任というものとはまだ無縁な、気楽な学生時代を共にした彼、ぼくたちの遊び場だった石橋の飲み屋での、今日は味方、明日は敵とでもいった目まぐるしく攻守所を変える、他愛ない、しかし緊張感を伴う合戦の日々を共にし

た北村くんです。ぼくにはそのあたりの公私の区別がうまく付かず、公人としての彼を困惑させたことも多々ありました。

会えば確かにお互に齢を重ね、年齢相応の老け顔に出会うわけですが、青春の日々を共有しているおかげで、気を許した遠慮のない話にすぐに移行することができます。

社交的な北村くんのことですから、退職後も直ちに晴耕雨読の隠棲に入るということにはならないでしょうが、これまで積み重ねてきた多分野にわたる長期の研鑽の成果の一つ一つに形を与えてほしいと思います。たとえば、北村卓著のボードレール論や宝塚歌劇論がぼくの書架に並ぶ日のことを思うと、その期待に、思わず笑みがこぼれます。

そういう期待の気持ちも込めて、このたび無事定年退職の時期を迎えることになった北村卓先生に心からご苦労さまと声をかけたいと思います。

(大手前大学教授)

「美男でお人柄も良く」

阪村 圭英子

「先生は美男でお人柄も良く、もちろん優秀な研究者であり、」と始まる一文は私が北村卓先生を語る際の incipit である。初出は荻野アンナ先生が私たちに集中講義にいらした 2000 年であった。

当時は急ぎの原稿のやり取りにメールを使用できる時代ではなかった。人気作家のアンナ先生は、講義後に研究室に連日遅くまで残り、原稿校正などの仕事をなさり、出版社とファックスでやり取りされる必要があった。そこで藤本助手はちょっと困惑してしまった。「美人作家先生」と夜分二人だけで在室しているのはいかがなものであろうか？確かにより便宜を図るならば女性の方が何かと好都合であろうということで、私が受講後に研究室に残る算段となった。

アンナ先生は、数多くの御著書も素晴らしいが、ご本人もとても魅力的な女性である。先生の仕事が終了後にふたりで夕食を取りながら話していると、私たちはほぼ同じ年でなにかと共通の話題が多く、たちまち意気投合した。そして直ちにありがたくも、先生ご命名の「嫁入り前シスターズ」が形成されたのであった。

ただいくら女子会が楽しいとはいえ、仕事後の食事時に何度も続けてシスターズふたりきりではいささか話題も単調となる。そこで私は一計を練って申し上げた。「ここ阪大には、美男でお人柄も良く、もちろん優れた仏文研究者で、数多くの業績があり、仕事をバリバリとこなされて、なおかつお酒にもとても強く、でも乱れることなく、いつもダンディで素敵な北村卓先生という教授がいらっしゃいます。そこで今夜の夕食に御同席いただいてもよろしいでしょうか？」アンナ

先生はご快諾。そしてその夜は、北村先生と三人で石橋へと繰り出した。

突然のお願いなのに、北村先生はパーカークトにアンナ先生と私の相手をしてくださり、食事後はバーにご案内いただいた。お酒のグラスを片手に、文学、芸術、人生論とトピックは自由自在、軽妙で芳醇な時間が流れていった。「嫁入り前シスターズ」ふたりは、大いに食べて、杯を重ね、心ゆくまで喋り、大満足の宵を過ごしたのであった。

以来、北村卓先生を語るには「美男でお人柄も良く」が私の脳裏では強固な結び付きの一句となっている。ちょうど二年ほど前に、まったく文学とは無関係の友人から問い合わせがあった。「阪大仏文学者の北村先生を御存じでしょう?」瞬時に私は答えていた。「美男でお人柄も良く…」。以下同文を聞いた友人は微笑んでいた。「素敵なお父様でいらっしゃるのね。」

世間は驚くほど狭い。阪大を離れられても、これからもどのようなご縁があるかわからない。そして、どこでどなたに問われても私はこの決まり文句を口にするであろう。「北村先生とは、美男でお人柄も良く、もちろん優れた仏文研究者で、数多くの業績があり、仕事をバリバリとこなされて…」と、よどみなく答えるのである。

(奈良教育大学非常勤講師)

北村卓先生に教わったこと

高岡 尚子

職場にせよ、住まいにせよ、何度か場所を移動していると、その場に入って最初に会い、教えを受ける人というのが、その後の活動や、大きく言えば生き方（その場での在り方、という意味での）を形作る手助けをしてくれているのだなあと感じることがしばしばある。私にとっての北村卓先生は、まさに、そのような存在だと言ってよい。

大学に入学したのは1982年のことだが、この頃は、2年後、3回生になるときに専門に分かれていくのがふつうだった。私たちが仏文研究室を、恐る恐る訪ねたときに、そこに助手としておられたのが北村先生だった。仏文研究室の様子は、現在も大きく変わっていないので、今でも容易に思い出すことができるのだが、窓辺の席に座っておられる先生は、にこやかで穏やかながら、いつも活気に満ちていて、私たちのような未熟な学生にとっては、親しく接することのできる頼もしい兄のような存在だった。翌年には、先生は言語文化部に移られるので、わずか一年のことだったのだが、この時間がどれほど貴重であったかを、のちに何度も思い出すことになる。

北村先生はその後ずっと言語文化研究科におられたこともあり、私が在学中に、

文学部で授業を受けることは、残念ながら一度もなかった。にもかかわらず、修士論文を提出した年の予餞会の折に声をかけてくださり、これからは学外のひとたちともつながりを持ち、研究会などにも積極的に出かけて行くようにと助言をしてくださった。一般企業に勤めていて、学部卒業後5年も経ってから大学院に進んだ身にとっては、研究者の仲間に入れてもらうことなど想像上の世界のことでしたしかなかったのが、こうして導いていただくことで、恐る恐るではありながら、そうした門を叩くことへのきっかけをつかもうという気持ちになったのだ。

同じようなことは、現在の職に就く際にも経験することになる。その当時は、家人の仕事の関係で埼玉県在住であった私が、まさか奈良の大学に職を得ることになるとは、これはさらに、想像外のことだった。久しぶりに関西に戻ってくることになり、何もかも戸惑いの連続だったところ、北村先生は、ガリアの研究会や関西支部会などで、ほとんどブランクなどなかったかのように、にこやかに声を掛けてくださいました。

北村先生には、常にこのように、最初の一歩を踏み出す際の励ましを与えていただいた。自分自身も誰かにとって、このような存在でありたいと思う。先生にはいろいろなことを話していただいたが、まだまだお聴きしたいことがたくさんある。ありがとうございました。そして、これからもよろしくお願ひいたします。

(奈良女子大学研究院人文科学系教授)

憧れの先生、北村先生

高橋 克欣

私がはじめて北村先生にご挨拶をさせていただいたのは、私が大阪大学に着任するほぼ半年前の2017年9月に京都で開催された、フランス語教育学会アジア大会の会場でのことでした。もちろん、以前から先生のお名前は存じておりましたが、ご研究に関してはもちろんのこと学会や仮査をはじめとしたさまざまな組織で要職を歴任されている高名な先生ですし、私はもともと大阪大学の学生ではありませんでしたので、実際に先生とお話をさせていただくまではとても緊張しておりました。

ところが、先生はまるでずっと前からご存じでいらっしゃるかのようにごく自然な打ち解けた雰囲気でお話ししてくださいました。そこで、私はすっかり安堵いたしました。そしてそのときに先生は、私が学生だった15年ほど前に恩師と共に学会発表をしたときのことを覚えていらっしゃるとおっしゃいましたので、私は予想外のお話に大変驚きました。いま振り返りますと、あのときに先生が私の過去の活動について触れてくださったのは不思議なことではなかったのだと思いますが、初対面の私のような者に対してさりげなくも温かいお言葉をかけてく

ださる北村先生の細やかなお心遣いに、大変感銘を受けました。

2018年4月からご一緒にお仕事をさせていただくようになってからは、日常のあらゆる場面で北村先生のさまざまなお姿を知るようになり、実に多くのことを勉強させていただいております。フランス語、フランス文学そしてフランス文化をこよなく愛する研究者としてのお姿、大阪大学を愛し、フランス語部会の来し方行く末を常に真剣に考えてご発言される大学人としてのお姿、尽きせぬ愛情をもって親身になって学生たちと接する教師としてのお姿、また宴席ではフランス文学フランス文化にとどまらずあらゆる分野にわたる数々の興味深い話題を肴になさり、どれほどお酒が進んでも常に品位を失わないかっこいい紳士としてのお姿、などなど。

学外でも、私がここしばらく仏検京都会場の運営業務に携わっている関係で、現在APEFの副理事長という重職をお務めでいらっしゃる北村先生には仏検関係のお仕事でもいつもお世話になっています。大変お忙しい中、2018年の秋季試験の際にはわざわざ京都会場の同志社大学まで足をお運びくださいました。そのときにも、先生自らすべての試験室をお回りになり担当スタッフのおひとりおひとりに直接感謝のお気持ちをお伝えになるお姿を拝見し、周りの方々に対して常に真心を尽くされる先生のお人柄にあらためて感銘を受けると同時に、責任ある立場にある人間のあるべき姿を学ばせていただいた気がいたしました。

ご退職を目前に控えられた現在でもこのようなご様子なですから、お若い頃からずっと、女子学生はもちろん男子学生にとってもさぞかし憧れの先生でいらっしゃったにちがいありません。そして、おそらく周りの先生方や職員さんたちの中にも北村先生のファンは大勢いらっしゃることでしょう。もちろん、かくいう私もすぐにファンになってしまいました。どれだけ努力をしても決して同じようにはなれませんが、自分も見習って少しでも近づくことができたら幸せと思われる憧れの先生、それが私にとっての北村先生です。

私はたった1年間しか北村先生とご一緒にお仕事をさせていただくことができず本当に残念でなりませんが、それよりもむしろ、1年間ご一緒できた幸運に深く感謝する気持ちのほうがずっと大きいです。まだまだ精力的にお仕事をなさる先生のお姿を拝見していると、あと数か月でご退職をお迎えになるとはとても信じられませんが、きっとこれからは丹波篠山のご新居でご研究に、ご趣味にと、これまでにもましてご活躍されることだと思います。どうかお体を大切になさり、いつまでもお元気でお過ごしになられることをお祈りしております。そして、またときどきお食事の席、お酒の席をご一緒させていただける機会に恵まれましたら幸いです。今まで長い間、本当に疲れ様でした。そして、どうもありがとうございました。

(大阪大学准教授)

“伝説”との遭遇

寺本 成彦

大阪大学フランス文学科に小生が所属して以来、北村さんには駆け出しの頃の演習発表の後などいくつも助言をいただいた。それにもかかわらず、そのような学恩についてではなく、北村さんにまつわるある意味で取るに足りないような些事ばかりを敢えて書き連ねることになるので、どうかご容赦願えればと思う。

仏文科に小生たち1980年度入学生が進学した年、言い換えれば北村さんが20代最後の日々を過ごされていた頃、アルバイトにお忙しかった北村さんには研究室ではなかなかお目にかかるなかったが、研究室にいる先輩方の“尾ひれ背びれ胸びれ”が付いたよもやま話を通じて、伝説的な人物「キタムラサン」として小生たちの脳裏に鮮明に刻み込まれることとなった。曰く「大学のグラウンドを走って逃げるのを彼女に追いつかれ、結婚することになった」（要するに逃げ足が遅かったから？）とか、「和具（英虞湾にあった阪大の海の家）での仏文科学生による合宿中、備え付けのボートにバケツで海水を汲み入れて沈没させてしまった」（何という無償の行為！）とか、折に触れて聞かされたものだ。

今もって真偽のほどは定かではないこういったエピソードに加えて、「キタムラサンに会いたかったら、夕方、石橋（阪大下の学生街）の“保呂醉”（居酒屋）に行ったらいいよ、バイトしているから」というのもあった。これは最も信頼のおける情報ではあったが、居酒屋で立ち働いておられる北村さんを目撃するために“保呂醉”に足を向けることはなかったよう思う（今となっては残念）。

ほどなく、北村さんが仏文科の助手に就任され、「北村先生」となられた。しかし、それでもわれわれ学生は敬愛の念を込めて「北村さん」と呼び続けていたのだが、それはご本人がそれを当然のように受け止め、いやな顔一つされなかつたためでもあろう。助手時代には、「助手対学生」という立場上、北村さんは一貫してきわめて控え目な折り目正しい物腰であり、それまでさんざん聞かされていた“伝説”との乖離がはなはだしく感じられた。それはまるで別の二つの人格、「キタムラサン」と「北村さん」がいるかのようだったが、どちらが本物なのか見当がつかぬままに数年が過ぎていった。そして小生が修士課程を終わる頃、北村さんはめでたく阪大言語文化部に就職されることになった。

それからさらに幾星霜、輪読会や私の研究会、ガリア研究会、日本フランス語フランス文学会などでご一緒に、親しくお付き合いさせていただいたと思う。とは言ってもその間も北村さんが「キタムラサン」と一致することはほとんどなかつた。しかし、やがて2度ほど特權的瞬間が訪れた。一度目は小生が助手をしていた頃だったが、阪大での何かの会合の流れで、北村さんの馴染みのスナックにご一緒した時のことである。店に入るや、一人で店を切り盛りするママさんを手助けして北村さんが立ち働き始められた。それがわざとらしいところがまたくな

く、その場になじんだ身のこなしであることに痛く感銘を受けた。

もう一つは、小生が仙台に居を定めてから最初の帰阪の折、阪大での何かの研究会の後に起こったことである。石橋での宴会もお開きになり、最終電車もなくなった深夜、随分酩酊した小生が数キロの距離をどうしても歩いて帰ると言い張るのを北村さんがたしなめ、「タクシーに乗って帰るように」と厳命された。その後の詳しい経緯はあまり判然とはしないが、押し問答の末に取っ組み合いになつたように記憶している。傍から見れば児戯のようなもので、単にふざけ合っていると映つただろうが、本人たちは至極真剣であった……

その翌日、宿酔の頭痛に悩まされながら昨夜の「キタムラサン」の姿を思い返し、無事に帰宅できたお礼とお詫びの電話を北村さんに差し上げたことを付記しておく。

(東北大大学教授)

あの優秀な学生さんが... もう退官！

中村 啓佑

北村君（当時に返って、あえて君で呼ばせていただく）は、私がフランスから帰って一番最初に教えたクラスにおられた。シューッとした学生だったから記憶にハッキリと残っている。「シューッとした」というのは、彼の知性に対する賛辞である。あれから40数年、まさか、彼の退官を祝う原稿を書くとは思ってもみなかつた。ありがたいことである。

北村さんと親しくなったのは、数年後、当時私が主宰していた「フランス語教育を考えるつどい」で、いっしょに仕事をしたからである。まだ手書きをしていた会の記録が、ワープロ打ちになって一挙に見やすくなったのは、すべて北村さんの力である。「いっしょに仕事を」と言えば聞こえは良いが、過去に教えたということだけで、ずいぶん無理なことを、しかも再三お願いしたのではなかろうか。それでもいやな顔一つなさらずに、いつも短期間に、綺麗に仕上げてくださったことをよく覚えている。この場を借りて、あらためてお礼を申し上げるとともに、当時のいたらぬ自分を恥ずかしく思い、遅まきながらお詫びしたい。

まじめな話はさておき、よくみんなで飲みに行きましたね。いろんなお店に行きましたが、忘れられないのは、初めて日本橋の「節」というお店へ行ったときのことです。あまりに立派な店構えに、みんなで鳩首会談、思い切って入ったのはいいが、懐が不安でほとんど飲まず食わず…勘定書きを見たら意外と安かった。驚いて女将さんに言ったら、「ほとんど何も飲んでいないのだから、あたりまえ」と言って、笑われました。

それからまた時がたって、北村先生は大阪大学言語文化部になくてはならぬ人

材として成長され、学会や社会での活躍もはなばなしく、だんだんに私からは遠い存在となっていかれた。

あっという間に年月がたち、久しぶりに噂を聞いたと思ったら、退官！

お礼やら、お詫びやら、お祝いやらを一挙に申し上げることになってしましました。

ご退官、おめでとうございます。長い間、ほんとうにご苦労様でした。

(追手門学院大学名誉教授)

ボードレール、ドービニエ、サルトル、ハーン

濱田 明

北村さんが仏文の助手をされていた1983年から3年間、私は学部4年修士1年2年と大変お世話になった。

思い出すとその時の自分に呆れるばかりだが、大学院入試の後、満足な答案を書けなかったこともあり勝手に不合格だと決めつけ、一次試験の発表の日も下宿でベッドに寝転がって白土三平の『カムイ伝』を読んでいた。そこに北村さんから「何をしている、面接があるからすぐに来なさい」と電話があり、急いで大学に行き、どうにか面接試験を受けることができた。

北村さんがまだ大学院生だった頃、「バロックって面白いよ」と、そして『悪の華』初版のエピグラムに引かれていたドービニエの『悲愴曲』の話をして下さった。ドービニエの名前を知ったのはその時が最初だったと思う。卒論から修論、それ以降もドービニエを主な研究対象とすることになったのだから、学恩は大きい。

最初に観たフランス語の演劇、サルトルの『出口なし』も北村さんに連れて行って頂いた。それこそ密室劇で展開もフランス語も分からず、ただ目を開けて見ていただけだったが、役者のやりとりの緊迫感に圧倒された。演劇と言えば、北村さんは学生時代、たしか大学の劇団で役者をされていたはず。お酒の席、どこかの座敷だったか、迫力のあるセリフ回しを聞いたことがある。その時の北村さんはいつもまして恰好よかった。研究室、石橋の飲み屋、ディッソン先生宅のクリスマスパーティ、和具にて北村さんと楽しく過ごした時間を思い出す。

北村さんの研究対象は比較文学、モスラ、宝塚と幅広く、近年はラフカディオ・ハーンとボードレールについての論考もある。勤務先でかつてハーンが教鞭をとった関係で私も最近少しハーンを読んでいるが、2016年2月、富山大学で北村さんとご一緒した際、「濱田君と富山のハーンの研究集会で一緒になるとは」と、あの笑顔で声をかけて頂き、とてもうれしかった。

北村さん、長い間お疲れ様でした。学会などでまたお目にかかるのを楽しみ

にしています。

(D.1993 年度)
(熊本大学教授)

北村先生の思い出

林 千宏

北村先生と聞いて私の頭に真っ先に思い浮かぶのは、まずは学会などで颯爽と壇上で挨拶をされるお姿、また言語文化研究科の専攻会議で、納得のいかない方針に対してフランス語を代表して毅然と抗議をなさるお姿が目に焼き付いている。さらにはフランス語教育振興協会（APEF）関連のお仕事でミスの多い私に何かと細やかにフォローをして下さりながら、着々とお仕事を進められる、その姿にはただただ頭を垂れるばかりである。またバーのカウンターでシングルモルトウイスキーを手にされた北村先生は、まるで映画の中から抜け出してきたかのようだ。

とはいえこうしたお姿だけではない北村先生も同時に私の脳裏には浮かぶ。じつは先生のお住まいは私の実家の目と鼻の先で、生活圏が長い間一緒でもあった。ご自身でもお料理をされる先生は、にこやかに「あのスーパーでは何時以降何が安い」という話題や、「どこのパンがおいしいか」という話題をいつもの美声でなさるのだ。このギャップがもたらす格好の良さに私は何度しびれたか分からない。

さらに北村先生は時に魔法も使われるのを私は知っている。研究会後の懇親会でその場の誰もが楽しそうにしている時、そこには必ず北村先生がいる。さらにその2次会や3次会での北村先生の歌を聞いたことがある方なら、一層ご理解いただけるだろう。歌う先生の周りにはオーラが漂い、その場にいる誰もがうっとりしてしまうのだ。だがじつは北村先生の魔法はこれだけにとどまらない。

ある日、こんなことがあった。例によって私が大学でバタバタと動き回っているうちに鍵束をなくしてしまった。大慌てで学科中の心当たりを尋ねてまわり、自分の研究室や資料室をひっくり返して探していた。すると、資料室に居合わせた北村先生は冷静に鍵をなくした時の状況を尋ねられ、こう言って一緒に探して下さった。「こんなところから！ というところから出てくるものだからね。」

だが一向に見つからない。とりあえず研究室に戻って、ちょっと落ち着いて考えてみたらということで、私は自分の研究室に戻ったところ、すぐに事務補佐の梶さんより電話があった。なんと、北村先生が届けてくださったとのこと（！）先生は一体どんな魔法を使ったのか。驚嘆しつつ資料室に向かったところ、途中で階段を軽やかに駆け上がって来られた北村先生に出会った。お礼を申し上げる私に、先生が顔を赤らめて一言。「ごめんごめん、僕のポケットに入ってしまったわ！」このすこし恥ずかしそうな北村先生の姿に、私はさらなる魔法にかけられ、ぼうつ

としました。

だから、北村先生が退官なさるとはいっても、私はどこかこんな風に思っている。われわれが困っている時には北村先生はまた爽快と現れ、その魔法を駆使して助けて下さるだろう、と。そして皆が例外なく楽しくお酒を飲んでいる、そんな時にもそこには北村先生が必ずいてくださるはずだ、と。

(大阪大学准教授)

北村先生と私との幾つかのエピソード

廣田 大地

ボードレール研究という果てしない大洋の中へと漕ぎ出していく上で、北村先生という先輩の存在はこの上なく心強く、いつも灯台のように進むべき方向を照していただいてきた。とはいえ私が北村先生とお近づきになれたのは、もう学部4年も終わろうとしていた12月のこと。柏木先生の『悪の華』の演習に感化されたこともあり、比較的早くからボードレールで卒論を書くことを決めていたが、なかなか言文の北村先生のもとを訪ねられずにいたシャイというか要領の悪い22歳の私であった。関西支部会の懇親会で、廣田くんちょっと、と北村先生から声をかけていただき、近づいてみると、そこにはもう一人、大阪芸術大学の山田兼士先生の姿が。ボードレール研究会のツートップに挟まれるやいなや、「廣田くん、ボードレール研究会で発表してみないか?」「それじゃあ山田さん、日程は彼の卒論審査が終わった2月後半で。」とお二人の間でどんどん話が進んでいく。恐れおののき戸惑う私に、北村先生は「廣田くん、やるの? やらないの?」と眼光鋭くお尋ねになる。「ハッ、ハイ、ヤリマス! 発表サセテクダサイッ!」と、私の研究会デビューが決まったのであった。

その後は、このボードレール研究会で、何度も発表の機会をくださり、文字通り、びしぶし鍛えていただいたのだが、他にも北村先生とは修士に上がってからは、例えば共通教育のフランス語でのTAとしてなど、お話をさせていただく機会が増え、その度にボードレールについてだけでなく、フランス語教育について、研究者として生きることについて、少しずつではあるが、的確な表現とタイミングとで、愚直な私に語りかけてくださったように思う。「廣田くん、我々は結局、二足の草鞋を履いて行かねばならないからね。」という言葉は、今それだけ取り出してみればありきたりな言葉かもしれないが、研究会の飲み会帰りの電車の中で、まだ議論の熱が冷めやらず熱くなっていた私に、優しく諭すように言っていただいたからこそ、今まさしく自分自身も同じようにフランス語教育とフランス文学研究とを両立させて働くねばならないようになってから、ひしひしとその重みを感じている。

落ち着きがあって、知的で、ハリー・ポッターのスネイプ先生にも似たミステリアスな魅力をもった大人な先生、というのが、修士の頃の私にとっての北村先生のイメージであったが、博士後期課程に入ったころからは、また別の一面を見せていただくことも増えてきた。石橋の某居酒屋では、「学生の頃はここでバイトしていたんだよ」と店の大将をまじえて昔話を聞かせてくださることもあり、まだ映画館があったという古き良き石橋にタイムスリップしたかのような気がした。と思えば、やはり石橋のスナックに三次会で連れて行っていただいた折には、「廣田くん、このカラオケ採点機能があるから勝負するぞ」と歌い始めたり。(結局、僅差で私が負けた。) 実家に居着いた猫ちゃんの愛らしさを、急に目を細めて語り出したり。おそらく、懐が深く、誰よりも器用で、そして情に厚い北村先生にとっては、その人その人、その場その場で、もっとも相応しい自分の姿を選んで見せることができるのでないだろうか。私が見てきた北村先生の姿は、石橋の店の数と同じだけの顔を持つ「石橋の帝王」こと、北村先生の変幻自在の姿のごく一部でしかないのかもしれない。

さて、北村先生と私との、ボードレール研究者の先輩後輩としての間柄はとうと、その後も、2009年にパリで開かれたボードレール国際シンポジウムでともに発表者として参加したり、その数日前に行われた私の博士論文公開審査にも駆けつけてくださったり、2015年にアメリカで開催されたボードレールと日本をめぐるシンポジウムにも一緒に参加したり、また今年度もボードレール研究会の準備を、北村先生の強力なサポートのもとに進めている。まだまだ現在進行形の話なので、「思い出」というかたちでは書きようがない。これからも末永くボードレール研究、あるいはフランス語教育関連で、北村先生とご一緒にお仕事させていただけることを願っている。

(神戸大学准教授)

琥珀色のムッシュー

深川 聰子

やった！と思いました。学部2年の春、講義情報『おまちかね』(90年代前半、ホチキスで製本されたパンフレットを友達と割り勘で入手するのが習いでした)で「琥珀色のムッシュー」と評された北村先生が必修フランス語のご担当だと知ったからです。キャーキャー言いたいお年頃です。…が、然して、授業は硬派でした。構造主義言語学の主要概念をソシュールやバンヴェニストらの原典の抜粋(丸山圭三郎編、*Qu'est-ce que le langage?*)で学ぶ講読です。打楽器に夢中で授業の予習どころではなかった不真面目な学生がスティック片手に駆け込む夕方の口号館LL教室はどこか暗く、後列に陣取って訳読の順番が回ってこないことを祈りなが

ら先生のお顔をチラ見する日々。それがいつからか、面白くなってしまったのです。synchrone / diachronie、signifié / signifiant / référent / signe、dénotation / connotation。スティックで打面を刻んで空気を切り取るように、フランス語は世界の輪郭をくっきりさせてくれる言語なのだと感じたのです。お洒落だと軽く選んだフランス語が初めて自分にとって大切な物になつた、難しいからこそ分かりたいと思えた、あの授業に改めて心よりお礼を申しあげます。

先生の「琥珀色のムッシュ」たるお姿をより立体的に感ぜられるようになつたのは、大学院に入ってからでしょうか。バルト『表象の帝国』の講読で、魚の身をほぐす箸の所作に触れたくだりをダンディに解説された記憶とおぼろげにリンクするのは「保呂醉」のホッケ（サービスのお味噌汁とフルーツ付き）。爾来「石橋の夜の帝王（伝聞ママ）」の帝国はどこまでも広く、お店（居酒屋、ビストロ、スナック、立ち飲み、スペインバル）も話題（文学、宝塚、漫画、シャンソン、朝ドラ、猫）もボーダーレスで無尽蔵。先生のこのまろやかさこそが琥珀色だったのです。

北村先生はまた、長年にわたって仏検（実用フランス語技能検定試験）の実施と普及にご尽力くださり、実施団体のフランス語教育振興協会では現在副理事長をお務めいただいていますが、決して愉快なことばかりではない試験運営の実務でさえ、先生がいらっしゃると何か楽しいことが（少なくとも仕事の後にはきっと）ありそうな気がするから不思議です。フランス語に携わるさまざまな方々の樹液をまろやかに溶かしながら、先生の琥珀色がこれからもますます輝かれますことを祈念いたしております。

((公財) フランス語教育振興協会)

助手時代の北村さんの思い出

松田 和之

二年間の教養課程を終え、学部生として仏文科に所属することになったのは、かれこれ三十五年前のことになる。十年がひと昔であるとすれば、三つ半も昔のことになるわけだが、その当時、仏文科の助手を務めておられたのが、北村さんだった。いつ、どこで、どのような形で、北村さんに初めてお目にかかったのか、記憶が定かでないが、場所はおそらく仏文研究室。その窓から見える小ぶりな桜の木が淡く色づいていたはずである。

私たち同期の六名が仏文研究室のメンバーとなった年は、阪大の仏文科が新体制に移行した年でもあった。ちょうどその年に、神戸女学院から阪大に移籍された柏木先生が助教授に、そして北村さんが助手に着任されたのである。当時はそうした事実を特に意識することもなかつたが、他の学科の友人たちが仏文研究室

の雰囲気の良さをよく口にしていた理由がそこにあったことに、今更ながら気づかれる。事実、当時の仏文研究室には他の学科の学生たちも気軽に立ち寄れる雰囲気があり、実際に入り浸っていた人もいたように記憶している。そうした自由で闊達な場の空気が北村さんのお人柄によってもたらされたものであることは言うまでもない。思い返してみると、北村さんは自分の個性を強く打ち出すことなく、むしろ一歩引いたところから私たち学生の挙動を見守ってくださっていたような気がする。

阪大の助手の中には、「先生」とお呼びしないと失礼に当たるような方もいらっしゃったが、北村さんは、ごく自然に「さん」付けでお呼びすることができた。それもそのはず。私たち六名が教養部生として口号館やイ号館で授業を受けていた頃、北村さんは文学部棟で、大学院生として、やはり授業を受けておられたのである。「定年」という言葉がこれほど似合わない方も珍しいのではないかと思えるほど、北村さんは現在もお若く見えるが、あの頃は実際にお若く、しかも「仏文の風間杜夫」などと渾名されるほどの男前であり、密かに憧れる女子学生も少なくなかったに違いない。

北村さんは仏文科（文学部）の助手を三年間務められたのちに言語文化部に移られ、多方面で活躍されることになるのだが、私の中では、三十五年経った今も、助手と学生という北村さんとの関係性が活き続けている。記憶というのは不思議なもので、今こうしてパソコンの前に座っていると、そうした関係性にまつわる北村さんとの思い出があれこれ甦ってくるのだが、それらはいずれも時系列から解き放たれた断片的なものであり、おそらくそこには多少なりとも脚色が加わっているに違いない。文学部のソフトボール大会で北村さん率いる仏文チームの一員として共に戦ったこと。阪大の仏文科の夏の恒例行事であった和具での合宿の折に、入り江に浮かぶ筏の上で、学生時代の北村さんが停泊中の船を沈めた武勇伝に聞き入ったこと。ポスター貼りのアルバイトでオリエンテーリングながらに北摂をバイクで駆け巡ったのちに、北村さんのご自宅で手料理のパスタをご馳走になったこと。何かの二次会で北村さんに連れられて入った石橋の路地裏の小さなスナックで中島みゆきの『悪女』が流れていたこと…。

おそらく北村さんご自身が覚えておられないようなものも含めて、思い出は尽きないが、最後にもうひとつ、感謝の気持ちを込めて私的なエピソードを紹介し、拙文を締めくくることにしたい。大学四年の冬、就職活動に挫折し、半ば自暴自棄になって大学院を受験したのだったが、気が置けない先輩たちから傾向と対策を伝授されていたとはいえ、準備不足は否めず、試験会場の教室で首を垂れていた。ドアが開く音がし、顔を上げると、入室した試験官と目が合った。北村さんだった。ひきつった顔をしていたに違いない私に、北村さんはさりげなく笑みを投げかけてくださった。その時に心がすっと楽になったように感じたことを、今でも不思議なほど鮮明に覚えている。助手というポストがあった時代に阪大の仏文科で学べたこと、そして、学部に上がった時の助手が北村さんであったことを、

つくづく幸運に思う。

(福井大学教授)

高邁の人、北村先生

山上 浩嗣

北村卓先生とはこれまで、学内外の多くの仕事でご一緒させてもらった。とりわけ、仏文学会関西支部で、北村先生が支部長を、私が支部代表幹事を務めた3年間（2015～2017年度）は、同時に北村先生が理事を務められるAPEF（フランス語教育振興協会）で、私が専門委員を引き受けたので、しばしば親しく接する機会があった。またここ数年は、年に2回北村先生が統括される仏検2次の大坂会場での面接試験の手伝いもしている。関西でも東京でも、仕事のあと何度も共に杯を傾けた。そのどれもが心地よく思い出される。

店にはたいてい北村先生が案内してくれる。行きつけの店もあれば、入念な調査の末に選んで予約してくれた店もあれば、適当に歩いているうちに「ここよさそうやな」と入ることもある。どの場合もはずれたためしがない。なじみの店の場合は、連れ立ってやってきたひとりひとりを店主に紹介してくださる。店主も北村先生が来ると嬉しそうに迎え、とっておきの品を出してくれたり、ときには安くしてくれたりする。ある店で、北村先生が女主人に「いつもお世話になっているので」と言って日本酒の瓶を渡されたのには驚いた。私はよく通う店でも主人に声をかけるすべを知らないので、このような気さくな交流をとてもうらやましく思う。

酒席では私は仕事の愚痴をこぼしがちだが、北村先生は嫌な顔ひとつせずに聞いてくれる。一方、北村先生の話題はフランス文学、比較文学、タカラヅカはもちろん、漫画からテレビドラマまで幅広い。楽しくてつい深酒してしまう。とくに仏検の面接試験のあの打ち上げでは、天満橋の商店街の何軒かをはしごするので、日付が変わる前にお開きになることはまずない。

酒の話ばかりになったが、言いたかったのは、北村先生は、他人への思いやりが深く、つねに和と協調を大切にされるということだ。どんな場でも自分ではなく身の回りの人のことを第一に考えて行動される。人一倍お忙しいのに、面倒な仕事を進んで引き受け、人の苦労にはねぎらいの言葉を惜しまれない。北村先生を見ると、デカルト『情念論』にある「高邁の人」(les généreux)についての説明が思い浮かぶ。

「他人のために善をなし、自身の利益を軽視することをもっとも尊重するがゆえに、誰に対してもつねに丁寧に接し、愛想よく、親切である。」

いや、「自身の利益を軽視」というのは少し違うかもしれない。北村先生は、他

人に親切であると同時に、自分も一緒に陽気に楽しまれる。だからみなも愉快になるのだ。ひとつ忘がたいエピソードをご紹介したい。

2017年10月、関西学院大学で開催される仏文学会関西支部大会の1ヶ月前、同支部実行委員会は、半日の作業ののち、大会プログラムと次期委員選挙投票用紙を各会員に無事発送し終えた。…と思った直後に、同封していた被選挙人名簿に数名の氏名の記載漏れがあったことが発覚した。支部長の北村先生は一切誰もとがめることなく全責任を負い、会員約250名に訂正済み名簿を郵送することの承認を直ちに全委員から得た上で、数日後に封入作業を行うことを提案された。さて、作業は阪大言語文化研究科のフランス語資料室で行われたが、そこには北村先生の手でビールと簡単なつまみが用意され、参加者に北村先生の自宅がある丹波篠山名物の黒枝豆の束がおみやげとして配られた。本来なら余計だった仕事の場が、たちまち親しくにぎやかな交流の場となり、作業も円滑に進んだ。その後はもちろん石橋にくり出し、北村先生のおなじみの店で美酒をいただいた。しかも、翌日北村先生から各委員宛てられた報告のメールには、前日に集まったみなに対する誠実な感謝の言葉が記されていた。私は感激するとともに、ここまで細やかな心配りは、とてもまねできないと思った。

北村先生が阪大を去られるのは淋しくて仕方がない。北村先生、これからもたまには飲みに行きましょう。今度は私がいいお店を見つけておきます。

(大阪大学教授)

北村卓教授退官記念号に寄せて ボードレール研究のことなど

山田 兼士

北村卓さんと私の交流は、おそらく大学院博士後期課程の終わり頃からなので、もう35年ほどになるだろうか。ボードレールとその周辺（日本文学を含む）を研究する者同士ということで、人見知りしがちな私としては、わりと早く打ち解けたように記憶している。日本フランス語フランス文学会での最初の研究発表もたしか同じ頃（1982年か83年頃）だった。出身大学も勤務先も（非常勤を含めて）まったく重なることがなかったが、互いの研究についてはかなり意識し合う関係だった。

北村さんとの関係が深まったのは、1997年にボードレール研究会を発足したことがきっかけだった。当時藤井寺にあった拙宅に同世代のフランス文学研究者が数名集まって、研究会の性質や方針などについて相談したのだが、その中で、あまり硬い組織にするのではなく緩やかな会にしよう、例えば「ボードレール友の会」というような、という提案をしたのは北村さんだった。結局は平凡に「ボードレール研究会」となったのだが、その中身は、かなり北村さんの意向を皆で承認した

かたちになった。まず、会費を取らないこと。会員はその都度の出席者をもって隨時増やしていくこと。もちろん入会も退会も自由。研究発表会は不定期とし、発表希望者がいれば隨時企画して実行すること。その発表要旨を「ボードレール研究会報」に掲載すること（A4判1枚3段組み両面刷りの簡易なもの、パソコン印刷）。それに、研究会の後は必ず懇親会（という名の飲み会）を行うこと（これは私の発案だったかも）などである。当初は年2、3回ほど集まつたと思うが（最近は年1度）、場所も、メンバーそれぞれの勤務先だつたり、アンスティチュ・フランセ大阪だつたりと、その都度決定した。

研究会での発表者は、きちんと数えたことはないが、現在（2018年11月）までに36回を数えるので、単純計算でのべ70人ほどになるはずだ。北村さんと私は毎回参加、そのうち、たぶん北村さんも私も10回ほど発表していると思う。会報の作成は、20号ぐらいまでは私が、その後は中畑寛之さんが、最近はウェブ上に移して、その管理を廣田大地さんが担当している。この文章を書くために古いデータを探したのだが、アプリが現在では対応していないために開けず、からうじて、印刷したものが12点見つかった。その中から、北村さんが私の発表について書いてくれた「司会者報告」の一部を紹介したい。第12号（2001年11月発行）からの抜粋である。

二つ目の発表は、山田兼士氏による「ボードレールと中原中也」。従来、中原中也といえば、ランボー、ヴェルレーヌとの関係が前面に押し出され、ボードレールの影は薄かったのですが、山田氏は、中也がその晩年、きわめて意識的にボードレールに深く接して自らの詩的営為に取り組むとともに、『悪の華』を全訳する企図すら持っていたのではないか、という実に刺激的な仮説を提示されました。

昭和42年に発見された中也の翻訳ノートには、『悪の華』の二つの作品（「序詞」「祝詞」）が翻訳され、またそのノートには1から8までの通し番号がついているとの指摘の後、山田氏はさらに、角川版『新編中原中也全集』第3巻に収められた宇佐美斉氏の解題、また日本で初めて『悪の華』を全訳した矢野文夫との交遊など当時の中也を取り巻く状況も踏まえた上で、中也における『悪の華』全訳の意図の可能性に言及されました。その根拠の一つとして、中也晩年の作品群とボードレールの作品との親密なテーマの繋がりを挙げ、中也の「曇天」とボードレールの「憂愁」を例に取り、詳細かつ説得的に論じられました。（以下略）

紙幅の都合でこれ以上引用できないのが残念だが、簡潔にして要を得た文章だと、今読んでもそう思う。この後、北村さんに背中を押さるようにして、この続きを次の研究会で発表することができた。

北村さんはこの春で定年退職されるわけですが、研究会に定年はありません。これからも長くボードレール研究会の盟友としてお付き合いくださることを願つて、拙文を閉じることにします。

（大阪芸術大学教授）

北村先生の思い出

山本 健二

2008年4月にフランス文学研究室の博士前期課程に入学してから単位修得退学までの8年間様々な思い出がありますが、今でも北村先生に初めてお目にかかった日のことを鮮明に思い出すことができます。2007年、大阪大学の大学院入試を準備していた私が、当時所属していた大学で指導していただいていた中村加津先生と関西支部会に行った時のことです。その頃の私はランボーに興味があったもののフランス文学の研究者に疎く、北村先生がボードレールを研究されているということ以外は、詳しく存じ上げておりませんでした。厳しい先生なのだろうか、寡黙な先生なのだろうかと不安を募らせていましたが、控え室に偶然いらっしゃった北村先生にお話をさせていただく機会があり、それまでの不安はたちまちに消え、大学院に入学したい気持ちがさらに大きくなつたことを今でも覚えています。

博士前期課程に入学してから一番楽しみにしていたのは、北村先生の『悪の華』や『パリの憂愁』の講読の授業です。当時ランボーを研究していた私にとってテクスト読解のテクニックだけでなく、詩の書かれた時代背景や詩人の思想に結びつけながら読み解く北村先生の授業はとても新鮮で、私に詩を読む楽しさを教えていただきました。時に日本文学との関係について話が及ぶと、フランス文学からの影響や比較がとても興味深く、ランボーにしか興味がなかった当時の私は視野を広げることができました。

授業以外で特に心に残っているのは、2011年12月パリで開催されたボードレールの国際学会での北村先生のご発表です。当時、私はレンヌ第2大学に留学していましたが、北村先生のご発表を拝聴したく思いパリへ行きました。そこには壇上で大勢の聴衆を前にフランス語でご発表される北村先生でした。日本から遠く離れたフランスの地で北村先生にお目にかかり、またお話をることができ、とても嬉しく思ったことを今でも覚えています。

院生だった時は、北村先生には修士論文の副査、ガリア研究発表会での司会、『ガリア』に投稿する論文の査読、留学から帰国後、ボードレール研究会で発表させていただいた時の司会など、大変お世話になりました。論文の査読では、私が疎かにしている箇所を鋭くコメントしてくださいり、身の引き締まる思いをしたことがあります。今年度で最後になることは非常に残念ですが、またご指導いただけることを心待ちにしております。

(龍谷大学非常勤講師)